

れから島三郎は、こゝのうどん屋の内に厄介になる事になりましたが、毎日所在がないので、商ひに行く時に連れて行て、向ふへ三膳、あちらへ五膳と持つて行く間は荷の番をさしたり、又手變りに運ばしたりして居ましたが、ちやうど四月の中頃になりました、いつもの通りうどんの車を路次へ引込んで、戸を締めて門を入れて『コレ婆さん、今戻つて来た、今夜はどういふもんか知らんが腰が痛んで叶はん、島三郎に手傳はせて荷を仕舞て下され、これ婆さんといふのに、また居眠りをして居る、コレ婆さんといふのに、年寄のくせに眠むたいなんて、早を片付とくれ』獨り言をいうて一服のんでをりますと、島三郎は荷を仕舞ひながら、何やらボシヤ／＼と話しをして居るやうです、ハテ路次は締めたし、門は入れてあるのに、誰も這入つて来た人もなし、誰と話をして居るのか知らんと覗いて見ますと、年の頃廿一二の綺麗な女と島三郎が立話をしています『イヤいかん、今お前がこゝへ来てくれると、私の尻まで上る』かましまへん、私がお親父さんに逢て話をします』『いかにといふのに、コ、のお親父さんは中々堅い人やさかいに』『マアあんたはそつちへ行つといでやす』と手を突きのけて『へい御免遊ばせ、これは未だお初にお目に掛ります』ハイお出でなされ』『私は新町南通木原席に勤めを致してをります吉野と申す不束者、こちらに御座る島三郎さんとは、深う言ひかはした仲、處が今年の一月大和巡りを致しまして歸りましてから、チ、プツツリとお越しがないので所々方々と尋ねましたが皆目とお行衛がわからず、今日、風の便りに聞きましたら、御當家様へ入聲

になつて御座るとの事、素より私も自前で働いて居りました故、儲け溜を親方さんえ千圓預けて置きました、今日この金を持つて参りまして御座ります、どうぞ、それを私の荷物とお思召して、此の島三郎さんのお嫁さんにして下されませ』『ハア左様、かこれ島三郎、お前がそこでキヨロンとしててどうするのや、萬事は私が胸にある、コレ姉さん上へ上りなされ、庭が狭い、兎も角も奥へ連れて行きなされ』無理矢理に二人を奥へ連れて行つて襖を締めました『コレ婆さん』『老爺どん、何んと綺麗な女さんやな』『サイナあれが島三郎の馴染んで居た女ぢやといな、エ、婆さん昔から歌にいうてあるな、女郎の誠と四角な玉子、あれば晦日に月が出るちうて、近頃は晦日に月が出て居るし、ア、して女郎の誠が出て來たら、この調子やつたら、近々に四角な玉子が見られるやろ、ドレ／＼これで腰の痛いのも忘れてしもた、荷を仕舞ひましよ、コレ婆さん、お前炭取を膳棚へ入れてどうするのや』『コレ／＼お老爺さん、お前もうどんの鉢を椽の下へ入れてどうするのや』『エ、慌てなさんな』『お前が慌てゝ居るのや』『コレ婆さん、どこへ行くのや、コレ人の話をして居るところを覗くのやないコレ何に涙ながらに話をして居る、ナア無理はないは、逢いに行きとうても行く事は出來ず、又逢いとうても居る所は知れず、久し振りに逢て積る話もあるわいな、時に婆さん今夜寝るのが難儀やナア蒲團があらへん』『サア私もそないに思ふて居るのや、モウ少し早かつたら家主さんとこへ泊りに行くのやけども、もう遅いよつて家主さんも寝てはるしなあ』『マア仕方がないよつてに、今夜久し